

162. 地場産業に依拠した交流事業の現状と課題

—長崎県波佐見町における産業振興を目的とした作家受け入れを事例として—

The Study on problems of the exchange activity that is connect with local industry

-The Case Study of exchange Activity in Hasami town ,Nagasaki prefecture-

澤田 章*・後藤 春彦**・田口 太郎***・井上 由梨*

Akira SAWADA , Haruhiko GOTO , Taro TAGUCHI and Yuri INOUE

The purposes of this study are to make clear the present conditions and a problem of exchange activity related with industry. For this purpose, this study takes up a exchange activity to accept a creator living in a production center of the ceramics which assumes ceramics local industry. It concluded that

1)Evaluation for an action is different between suppliers. For continuation, exchange activity have to be let to shift to one supplier. 2)The action will be effective to choose a way of deep interchange of a relation for local industry. 3)Continuation of a business is necessary.

Keyword: Exchange Activity, Local Industry, Urban Inhabitant

交流活動 地場産業 都市住民

1. はじめに

1-1 研究の背景

近年、地場産業の衰退した地域において、都市住民との交流によって地域の活性化を図る様々な事業が多く見られる。これらの事業は、住民の意識向上や地域の多面的価値を再発見するのに成果を上げてきた。実際に、新たな産業を創出したり¹⁾、まちづくりの交流事業から地域の生活環境整備²⁾が進められる等の効果が報告されている。

こうした交流活動は地域に新たな来訪者や、産業をもたらすことになるが、地域の人々の文化はあくまでその地域に古くからある産業に根付いたものであり、交流による意識向上はこうした地場産業の活性化に寄与するものであることが本来望ましい。

1-2 研究の目的

本稿では、都市住民との地場産業に依拠した交流活動の新たな可能性を示す。窯業を地場産業とする陶器の産地が都市に暮らす作家⁽¹⁾を地域に受け入れる事業⁽²⁾を取り上げる。

本交流事業が目的である産業振興⁽³⁾にいかに関与しているかという点に着目し、受け入れる地場産業の担い手の意識を対象に調査を進める。窯業従事者の交流事業に対する意見を属性別、交流形態別⁽⁴⁾、事業別に整理することで(1)窯業従事者の属性と交流形態を把握し、(2)交流事業に対する窯業従事者の評価と問題点を整理し、その課題を明らかにすることを目的とする。

1-3 研究の位置づけ

都市住民との交流が地場産業地域に及ぼす影響に関しては、小山³⁾らが交流施策の観点から分類を行っている。また、林²⁾らが過疎地域における意識高揚と環境整備に寄与する影響を報告している。前田¹⁾らは交流観光が伝統

的な茅葺集落維持に寄与する効果を明らかにしている。本稿は、都市住民との交流事業に関する一連の研究の流れを汲むもので、地場産業の衰退した地域において行われる、地場産業に依拠した交流事業の抱える課題を扱うものとする。

1-4 研究の方法

3章では、窯業の生産工程を、窯業関係者への聞き取り調査から把握する。また、交流事業従事者の類型化と交流事業毎の交流形態を聞き取り調査より把握する。4章では、アンケート調査と聞き取り調査によって把握した、交流事業に関係した窯業従事者の属性別、交流形態別、事業別に交流事業の効果と問題点に関する意見を整理し分析し、その評価と課題を明らかにする。

2. 対象の概要

2-1 対象の選定

研究対象とした長崎県波佐見町は、有田町に隣接し、古くから窯業の盛んな町である。

近年、産業の衰退を受け、窯業に関わりの深い、都市の作家を受け入れる交流事業を行っている。本稿では、町内で行われた地場産業に依拠した交流事業である「駆け出し陶芸家塾⁽⁵⁾」(以下、「駆け出し」)「ワークショップ⁽⁶⁾」(以下、「WS」)を対象として研究を進める⁽⁷⁾。

2-2 対象地の概要

長崎県東彼杵郡波佐見町は、全国の一般家庭で使われている日用食器の約

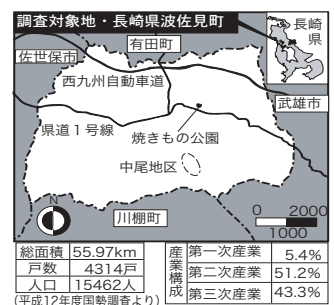


図1：調査対象地域

* 学生会員 早稲田大学理工学研究科 修士課程 (Graduate School, Dept. of Architecture, School of Sci. and Eng., Waseda Univ.)

** 正会員 早稲田大学理工学部建築学科 教授・工博 (Prof., Dept. of Architecture, School of Sci. and Eng., Waseda Univ., Dr.Eng.)

*** 正会員 早稲田大学理工学研究科 助手・工修 (Research Assoc., Dept. of Architecture, School of Sci. and Eng., Waseda Univ., M.Eng.)

13%を生産しており、全国でも有数の窯業産地であるといえる⁴⁾。概要を図1に示す。

「駆出」の行われた中尾地区⁽⁸⁾は、古くから窯業が営まれてきた。地区内で窯元連合を結成し、消費者の多様性に対応した生産を行い、町内有数の産地となった。現在でも、地区内業者の団結が強い。

「WS」の行われた焼き物公園のある地域⁽⁹⁾は、戦後新たに開拓された。高度成長期には磁器の大量生産によって町の窯業を支え、現在、町役場などの公共施設が集中し、大型工場の集まる波佐見町の中心となっている。

3. 交流事業の概要と交流形態

二つの交流事業の内容を表1に示す。

また、アンケート調査および、聞き取り調査の結果を表2に示す。

3-1 従事者の関わる産業工程

交流事業に関わった従事者の行う産業工程をアンケート調査より把握した(図2)。下記のように3つに類型化した(図3)。

(i) 全工程型：商品生産の工程と商品開発を担う窯元従

表1：交流事業の概要

駆け出し陶芸家塾	取組	ワークショップ
ものづくりのための人材育成	目的	学生同士の情報交換と育成
9年	継続年数	2年
主催は波佐見町、受け入れは中尾の自治会	主催	波佐見町で活動をしている陶芸作家が個人的に企画、グリーンクラフトツールズ研究会が主催
中尾窯元連合に加盟している窯元のうち、受け入れ可能な窯元	受け入れ世帯	G.C.T.の関係者や、その友人、血縁関係にある世帯
首都圏の美術系大学在学中の学生10人	参加学生	その作家との関係のある美術系大学在学中の学生で、首都圏の大学が多い
沖積地域にある「焼き物公園」	活動場所	中尾地区
夏休みと春休みの2回、一週間程度	活動期間	夏休みの二十日間
参加者がそこで陶芸を学ぶことを重視し、受入手は制作の手伝いという形で関わる	取組概要	参加者の自発性を重視し、受入手は主に宿提供という形で関わる

商品開発	石膏型製造	生地成形	素焼き	下絵付け	施釉	本焼成	上絵付け	元卸	関連
発する新たな商品や産品の仕組みを開	の型を作る基本となる生地	作る陶磁器の生地を	焼成するその後の工程を円滑にするため	下地の絵付けをする	表面を滑らかにする	焼き上げる	仕上げの絵付けを行う	消費地へ流通させる	窯業関連の商品開発、取り扱い

図2：窯業における産業工程

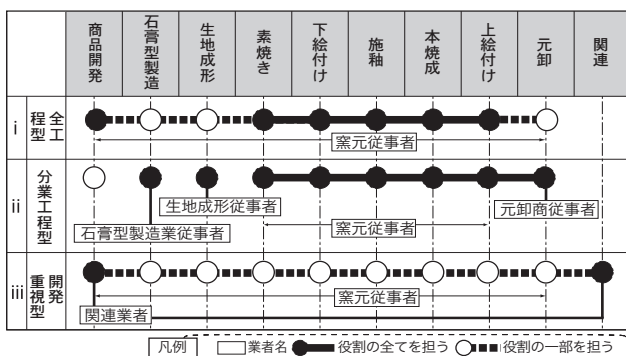


図3：属性と担う役割の関係図

事者を指す。

(ii) 分業工程型：生地製造業従事者、石膏製造業従事者、元卸商など、産業工程を担い商品開発を行わない従事者。

(iii) 開発重視型：商品開発を行い、生産工程にはほとんど関与しない窯元従事者を指す。その他、商品開発を行う関連業従事者も含む。

3-2 各交流事業に関わった従事者の属性

各類型の従事者の年齢、創業時期⁽¹⁰⁾、業種、後継者の有無⁽¹¹⁾、関わった交流事業についてアンケート調査を行った(表3)。

その結果、以下のような特徴が明らかにされた。

(i) 全工程型：業種は窯元のみであり、「駆出」に多く見られる。

(ii) 分業工程型：業種としては元卸商がほとんどであり、「WS」にのみ見られる。

(iii) 開発重視型：業種としては窯元と関連業者に分けられ、それぞれ「駆出」、「WS」に見られる。また、後継者について、血縁による継承ではなく、『地元で焼きたいという人が欲しい』という意見のように柔軟な「新しいシステム」を望んでいることがわかった。

3-3 各事業における交流場面

表3：従事者属性一覧表

類型	番号	年齢	創業時期	工程	業種	商品開発	後継者	取組
i	①	30代	(I)	窯元業	窯元	○	○	親族 駆出
i	②	40代	(III)	生地成形、窯元業、元卸業	窯元	○	×	駆出
i	③	40代	(III)	生地成形、窯元業	窯元	○		駆出
i	④	30代	(III)	生地成形、窯元業、元卸業	窯元	○	×	駆出
i	⑤	20代	(III)	生地成形、窯元業	窯元	○	×	駆出
i	⑥	50代	(III)	生地成形、窯元業	窯元	○	○	親族 駆出
i	⑦	30代	(II)	生地成形、窯元、元卸業	窯元	○	×	駆出
i	⑧	50代	(III)	生地成形、窯元業、元卸業	窯元	○	○	親族または社員 WS
i	⑨	50代	(II)	窯元業	窯元	○	○	親族 WS
ii	⑩	50代	(III)	元卸業	元卸商	×	*なし	WS
ii	⑪	50代	(II)	元卸業、その他(事務)	元卸商	×	*なし	WS
ii	⑫	50代	(III)	石膏型製造 WS	石膏型製造	×	○	親族 WS
ii	⑬	50代	(III)	その他(木工品製造)	木材製造	×	○	(悩んでいる) WS
ii	⑭	20代	(III)	元卸業	元卸商	×	*なし	WS
ii	⑮	40代	(III)	元卸業	元卸商	×	×	WS
iii	⑯	40代	(III)	その他(園芸取り扱い)	関連業	○	○	親族 WS
iii	⑰	50代	(III)	その他(園芸取り扱い)	関連業	○	○	親族 WS
iii	⑱	20代	(III)	その他(園芸取り扱い)	関連業	○	*なし	WS
iii	⑲	40代	(II)		窯元	○	×	駆出
iii	⑳	40代	(III)		窯元	○		(新しいシステム) 駆出
iii	㉑	40代	(III)		窯元	○		(新しいシステム) 駆出
iii	㉒	50代	(II)		窯元	○		(新しいシステム) 駆出
iii	㉓	50代	(III)	その他(イノベーション)	窯元	○		(新しいシステム) 駆出
地域住民	㉔	50代		中尾郷自治会役員				駆出
	㉕	40代		「駆け出し陶芸家塾」担当者				駆出
	㉖	10代		波佐見町在住・学生				駆出

i：全工程型 I：江戸～大正 *なし：従業員のケース
ii：分業工程型 II：大正～戦前
iii：開発重視型 III：戦後～現在

各事業における交流場面⁽¹²⁾と交流形態を図4に整理する。

交流場面について、各事業において作家と従事者が一緒にいる時間を取り上げ、(1) 交流会 (2) 制作活動 (3) 作品を展示 (4) 日常での交流 (5) その他の5つに分ける。また、各事業での交流場面を表4に示す。

3-4 交流形態の整理

各事業における交流形態を図に示した(図5)。

以上より、二つの事業の一連のプログラムの中には、生活サポート、技術指導・アドバイス、作品鑑賞・講評、窯業に関する会話、日常会話の五つの交流形態の存在していることを把握した。

4. 事業の評価と問題点に関する意見

従事者の事業の評価を、属性、交流形態と事業の三つの観点より整理し、図6に示す。

駆け出し陶芸家塾	ワークショップ
歓迎夕食会、交流会 (3日) ③20代、30代の窯元は、顔合わせの時にはいるが、その後の交流はわからない。 創作活動 (13日) 技術指導、アドバイス ③従業員が絵付け、ろくろを教える場合もある。基本的には口出しをしない。 ⑥自分のところでは主に絵付け作業を行うが、アドバイスの最低限の注意をすること以外は口出しをしない。 ②基本的には本人の意志で後はのぞく程度。 作品展示、講評交流会 (1日) 講評会 ④自分たちで制作した器に自作の料理を盛って夕食をこ馳走になった。 日常での会話 ③ピアノの伴奏にギターを弾いてみんなで歌を歌った。 日常での会話、窯業に関する会話 ②③学生とは、焼き物の話をしたり。気の合う子とは食事をしたり。 地域との関わり ⑥学生の中で、朝一緒にグラウンドゴルフをするまで地域に溶け込んだ子もいた。 凡例: 交流場面 (黒), 交流形態 (白), ①~⑥: 属性者番号	交流会 開会式、顔合わせ (1日) 作業 (6日) 生活サポート ①当番制で窯焚きをしており遅いときは1時か2時まで作業していた。 ⑤窯焚きは夜中までやっていて差し入れたいくらいだった。 作品の展示販売/陶板の展示 (1日) 作品鑑賞 ①完成された陶板は、泊まっていた子の作品のみ見た。 ⑨陶器市のときに、全員の作ったタイルを展示した。 町民とのふれあい ②⑥自分はずっと近くに住んでおり、ふらりと立ち寄っただけだがほとんどの人が話しかけてくれた。 窯業に関する会話 ②工場で石膏の型作り、手順を教えてあげた。 ③④学生に過去作品を見せてもらった。 日常での会話、窯業に関する会話 ②夜通してしゃべった。遅いときは1時か2時くらいまで。接したのは朝食と夕食。 交流の日 (1日) 受入先と共に過ごす日 ①⑦ぶつうの友達として楽しんだ。

図4: 交流場面と交流形態整理

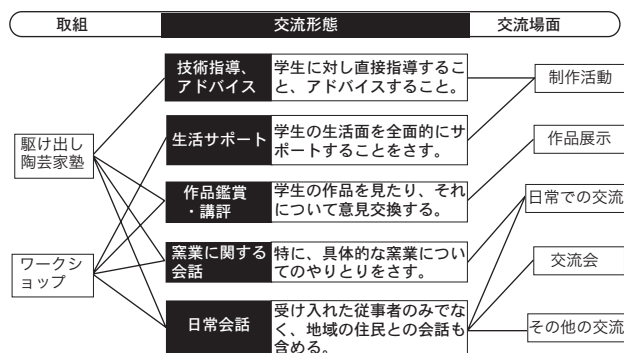


図5: 交流形態の整理図

4-1 属性別の評価

属性別の評価を表5⁽¹³⁾に示す。なお、表中のアルファベットは図6中に見出しと対応している。

(i) 全工程型: 一部で自らの仕事への活用が見られた。

事業によって『土瓶の口が人の唇になっている作品は印象的(C-6)』という意見のような、“商品の発想を得る⁽¹⁴⁾(C)”という評価のあることが伺える。また、作家に言われて伝統技法を復活させたという“発想を生産工程に活用⁽¹⁵⁾(G)”したという成果のあることが伺える。

以上から、全工程型の従事者にとって、生産工程の全般に関与している点が、発想を自らの仕事に活用したという評価につながったと考えられる。

(ii) 分業工程型: 『学生の焼き物に対する姿勢は見習いたい(A-12)』という意見のような“窯業への意欲を得る⁽¹⁶⁾(A)”という評価のあることが伺える。また、『わざわざ遠回りなやり方を選ぶが、それはそれで少量生産に応用できる(D-12)』という意見のような“生産工程の発想を得る⁽¹⁷⁾(D)”という評価が見られた。

以上のように、分業工程型の従事者は外部情報を得たなどから、事業を評価しているが、実益に結びつくような地場産業の振興に結びつかなかったと考えていることが伺える。

(iii) 開発重視型: 『自分の考えを変えるようなデザインで、活用しようと思っている(F-20)』という意見のような“発想を商品化に活用(F)”したという評価のあることがわかる。また、“人材を活用(H)”したという成果のあることが伺える。

以上から、開発重視型の従事者にとって、商品化できるような発想を得る部分で、事業を評価していることが伺える。

また、他の従事者には見られないが、その後の交流で人材を活用できたなど、事業によってできた人脈を活用したことが伺える。

4-2 交流形態別評価

各交流形態における評価を表6に示す。

「生活サポート」や「日常会話」では、窯業の作業場と

表4: 「駆出」「WS」の交流場面とその内容

交流場面	内容
交流会	「駆出」では、役場との共同でおこなわれ、受け入れ窯元以外にも、行政関係者、自治会役員等も招待される。参加者の受け入れ先が決定する時と最終日に行われる。
制作活動	「駆出」では、窯元も従業員も最低限の注意やアドバイスのことだけ伝え、基本的に口出しをしない。受け入れを行わない窯元も、生地提供や道具貸し出しを行った形で取組に関わる。 「WS」では、学生のみで行い、その場に受け入れ世帯はおらず直接的な交流は見られなかった。生活面を全面的にサポートしていた。
作品展示	「駆出」では、作品展示・講評会という形で行われる。20日間で制作した作品の展示と、それに関する講評会である。 「WS」では、一年目、完成した陶板の展示、二年目、桜陶祭での展示販売という形で行われた。また、取組みの第三者である町民とのふれあいも見られた。
日常での交流	「駆出」では、食事の差し入れや、気の合う参加者とは食事を共にすることもある。こうした場面では、情報や知識の交換もある。また、『学生の中で一緒にグラウンドゴルフ朝やるまで地域に溶け込んだ子もいた。』という意見のように、地域住民と接する場面も見られる。 「WS」では、この交流場面が大部分を占めている。食事の間の会話であったり、また、『夜通してしゃべった』というケースも見られた。
その他の交流	「WS」では、なか日に受け入れ側と参加者参加者が休みを共に過ごす日がおうけられた。『普通の友達として楽しんだ』という意見にも見られるように、お互いの気分転換のために行われた交流である。

は接することが少なく、窯業従事者が事業の成果を自らの仕事に活用していない。

「作品鑑賞と講評」では、特に発想を商品化に活用している例が多くみられる。「技術指導・アドバイス」、「窯業

表5：属性別の評価

	取組みの評価	分析の結果
全工程型	発想を生産工程に活用(G) 『伝統技法を復活させ市場に流通させた(G-3)』 『展示の仕方、学生たちからヒントを得た(G-2)』 商品の発想を得る(C)	商品の発想を得たのは、従事者が商品開発を行っているためであると考えられる。また、伝統技法を実際に活用できたのは、従事者が全ての工程に関わっているために可能となったと考えられる。
分業工程型	窯業への意欲を得る(A) 『学生の焼き物に対する姿勢は見習いたい(A-12)』 外部情報を得る(B) 商品の発想を得る(C) 『わざわざ遠回りなやり方を選ぶが、それはそれで少量生産に応用できる(D-12)』	生産工程の発想を得るためには、窯業の具体的なやり取りが必要であり、従事者が分業された工程に関与していることが重要な要素であると考えられる。 また、窯業への意欲を得たり、若手の人脈を得ることが出来たのは受け入れ世帯が高齢層であったためと考えられる。 全体として、仕事に活用できたと言った成果は見られないが、取組みの評価に関する意見は多く見られた。
開発重視型	窯業への意欲を得る(A) 商品の発想を得る(C) 『自分の考えを変えるようなデザインで、活用しようと思っている(F-20)』 発想を商品化に活用(F) 人材を活用(H) 『物販店に波佐見焼きを紹介してもらった(H-23)』	生産工程の発想を得たのは、開発重視型の従事者が、窯業の工程に直接関与しないため、逆に伝統にとらわれない工程の変化を求めているためであると考えられる。発想を商品に活用できたのは、製作に関して共通の知識があったためと考えられる。 また、他の従事者にはなかった人材の活用が見られるが、これは従事者の主な役割が商品開発であり、創作家と共同で仕事をしやすかったのと、次世代について柔軟に考えているため創作家と、作り手として対等な関係を築くことができたためと考えられる。

に関する会話」では、既存の生産工程を変化させる、発想を得るといった評価が見られた。窯業の生産工程を共有することで、従事者は自らの技術を教えながらも既存の生産工程を変化させる発想を得ていることが伺える。「その後の交流」では、手紙などのやり取りをしたり、仕事を共同で行うなどの交流が見られる。

表6：交流形態別の効果の整理とその分析

交流形態	効果に関する意見	分析の結果
生活サポート	窯業への意欲を得る(A) 『学生の焼き物に対する姿勢は見習いたい(A-12)』	従事者が制作活動に直接関わったわけではないが、生活面で全面的なサポートをしたことで、自らの仕事の意欲が高まった。
技術指導、アドバイス	生産工程の発想を得る(D) 『大きな筆を用いて、抽象的な表現をしていた学生が面白かった(D-23)』 窯業への意欲を得る(A)	従事者が、創作家の製作工程に直接関わることで、仕事への意欲が高まり、また自らの商品の生産工程の発想を得た。
作品鑑賞と講評	商品の発想を得る(C) 発想を商品化に活用(F) 発想を生産工程に活用(G)	実際の作品がその場にあり、これをもとにして講評することで、商品に活用できるような発想を得た。
日常での会話	地域経済の活性化 『有田の呉須や上絵の具、天草の陶土を買いにくる』 外部情報を得る(B)	創作家の制作に関して特に知識がなくても理解できて、かつ町内にはない、新たな情報を得ることで、地域内の意識変化につながった。
窯業に関する会話	発想を生産工程に活用(G) 生産工程の発想を得る(D) 地域での意識変化 『自治体全体も受け入れ体制ができてきた』	窯業の生産工程に関する知識を互いに持ち合わせており、双方にとって情報交換しやすく、仕事にも活用しやすかった。
その後の交流	人材を活用(H) 若手の人脈を得る(E)	交流の継続によって実益につながる成果が見られた。

	全工程型	分業工程型	開発重視型	その他取組関係者
生活サポート		窯業への意欲を得る(A) ■ 学生の、夜通して作業するという姿勢、焼き物への姿勢は見習いたい ⑫	窯業への意欲を得る(A) ■ 純粋に陶器を作ろうという子供たちは素朴でよかった。彼らの焼き物への姿勢は頭が下がる ⑬	地域経済の活性化 ■ 取組の結果、学生が有田の呉須や上絵の具、天草の陶土が好きになり、桜岡祭の時に毎回買いに来る ⑭
作品鑑賞と講評	発想を生産工程に活用(G) ● 展示の仕方、学生たちからヒントを得たものはある ② 商品の発想を得る(C) ● 土瓶の口が人の唇になっている作品や、裸体を百も千もかいている作品は印象的だった ⑥ 商品の発想を得る(C) ● 作陶の技術レベルが高い作品はよく覚えていた ⑤	外部情報を得る(B) ■ 学生に、過去の作品を見せてもらったが、女の子らしからず鉄を使ったオブジェつくっていた ⑮ ■ 若い人の話は、とてもいい情報だと思う ⑩	商品の発想を得る(C) ● 今まで考えられなかったところに鮮やかな色を使っており、感銘を受けることが多い ⑯ ● 大学生の感性には驚かされる。例えば焼き物の中に手紙を閉じ込めて焼成、手紙は焦げてしまい自分の思いだけ残ったという作品があった ⑰ ■ ワークショップでは、棚田をイメージしたプランターに驚いた ⑱ 発想を商品化に活用(F) ● 自分たちは製作段階で、安定を考えて高台をデザインするのだが学生たちはこれを小さくデザインした。これは自分の考え方を考えるもので、どこかに活用したいと思っている ⑲	商品の発想を得る(C) ■ 植木を植えるところがたくさんあるプランター、インゲンチャクの突起みたいなのがたくさんついているもの、題名と作品があまりにぴったりきている作品もおもしろかった ⑲ ■ 鮮やかな色使いに驚いた ⑲
窯業に関する会話	発想を生産工程に活用(G) ● 一時技法的に流行が廃れたと思っていた伝統技法を生徒が見て驚き復活させた技法もある。これは市場に流通させた ③	生産工程の発想を得る(D) ■ 学生の場合は原型から捨て方をつくるのに異様に時間をかける。わざわざ遠回りのやり方を選ぶ。それはそれで、少量多品種生産に応用できるかもしれないが ⑫ （若手の人脈を得る(E) ■ 葉書のやり取りを何度か行った ■ 今年の夏休みは、山形からバイクで個人的に来ることに ⑫	生産工程の発想を得る(D) ● 大きな筆を用いて抽象的な表現をしていた学生が面白かった。⑲ ● 工程を省く所が面白い。例えば、鑄込みのとき本物の竹を持ってきて石膏の型を作った子もいた ⑲ 人材を活用(H) ● 生徒がデザイナー事務所に勤めて、そのついで仕事 came したことも ⑲ ● 東京ドームの「ハウスウェアショウ」出展を塾の卒業生に手伝ってもらった ⑲ ● 物販店に波佐見焼きを紹介してもらった。 ⑲ ● 三年くらいの周期で、常に新しい子が入ってくるのありがたい。その子達の情報がまたありがたい ⑲	窯業への意欲を得る(A) ● 教えることで自分の基礎確認ができる。自分の原点を思い出し、考え方が変わる ⑲ 地域での意識変化 ● 独居老人が多い地域なので、こういった接触はいい。自治体全体も受入体制ができてきた。積極的に輪に加わられるようになってきた ⑲

凡例 〇：地場産業限定 〻：限定でない 〇：交流形態 ■：WSのコメント ●：駆出のコメント ①～⑲：属性番号

図6：取組みの評価に関する意見整理

「作品鑑賞・講評」と、「その後の交流」で多様な評価がみられる。また、「技術指導・アドバイス」「窯業に関する会話」等の地場産業に関わりの深い交流形態でも、多くの評価が見られる。ただし、これらは作家が学生であることに起因した評価であることが伺われる。

4-3 交流事業別の評価

「駆出」では、「地域での意識変化」や「地域経済の活性化」などの意見がみられた。この理由として、窯元連合の連携があり地域内の受け皿が整っていること、時間をかけて事

表7：取組み別の評価の整理とその分析

取組み	取組みの評価	分析の結果
駆出	商品の発想を得る(C) 発想を商品化に活用(F) 発想を生産工程に活用(G) 人材を活用(H) 窯業への意欲を得る(A) 生産工程の発想を得る(D)	中尾地区においては、地区全体で受け入れていること、地域内の窯元連合の連携が強いことから、地域での意識変化や、地域経済活性化につながっている。 また、取組みで得た人材の仕事への活用や地域経済の活性化があったのは、九年間継続して行っているためであると考えられる。
WS	外部情報を得る(B) 商品の発想を得る(C) 若手の人脈を得る(E) 生産工程の発想を得る(D) 『葉書のやり取りを何度か行った(E-12)』	取組みの成果として、仕事への活用が見られなかった。これは、継続期間が短いためであると考えられる。

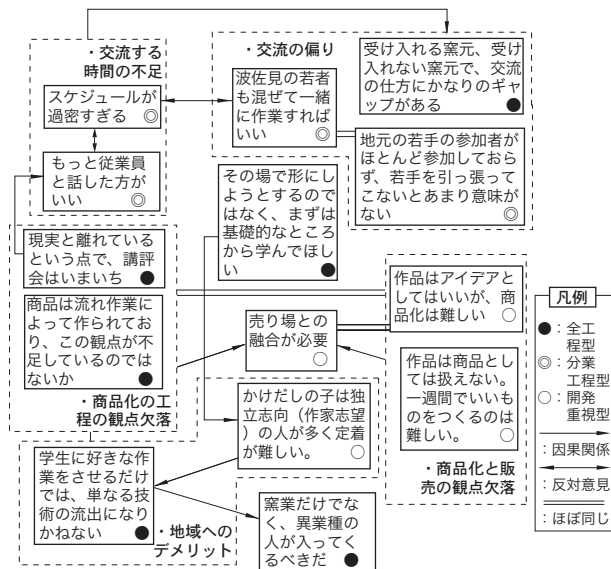


図7：取組みの問題点に関する意見

業を行うことで、継続的な活用が可能となっていることの二つが挙げられる。

「WS」では、成果の仕事への活用があまりみられなかった。これは、交流活動で窯業の仕事場に接する機会が少なかったためと、継続年数が短かったためであると考えられる。

4-4 交流事業の問題点

事業に対する意見の聞き取り調査の結果を図7に整理した。二つの事業において、交流する時間が不足しており、交流そのものに偏りがあることが指摘された。また、従業員との話し合いがなく、分業で商品ができるという商品生産の過程が理解されておらず、作品を商品化するという観点が欠落しているといった指摘も見られた。また、共同で作業することによる技術の流出を心配する指摘も見られた。こうした商品化するという観点の不足や技術流出への意見は、一部、開発重視型従事者にもみられるが、全工程型従事者に多くみられる。これは、自ら工程に関わっている全工程型従事者に窯業の技術を重視する傾向があるためであると考えられる。

また、受け入れる作家の地域への定着が難しいことも指摘されている。

5. まとめ

交流活動による評価と問題点のまとめを図8に示す。地場産業に依拠した交流活動には以下の三点の課題が考えられる。

(1) 業者間で異なる効果

開発重視型において、発想の商品への活用や、人材の活用等、自らの仕事に結びつく効果がみられた。一方、分業工程型は自らの仕事に結び付けるような成果はみられなかった。全工程型では、事業によって得た発想を生産工程に活用したという評価のある一方、事業に作品を商品化するという観点が欠落しているとの意見もある。

地場産業に関わりの深い作家を受け入れた交流事業のため従事者からの評価が多く見られるが、評価が業者間で異なっていることが伺えた。

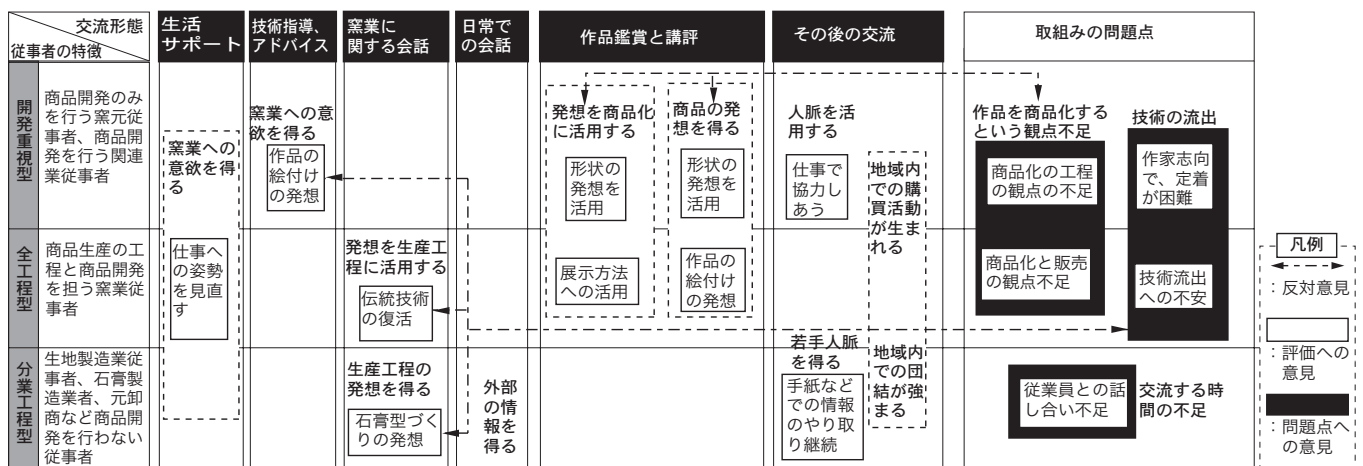


図8：交流活動による評価と問題点のまとめ

本稿で扱ったこのような交流活動は、開発重視型や、全工程型の一部の従事者にとっては有効であったといえる。今後、交流事業をこうした従事者中心の取り組みに移行してゆくことにより、交流事業を継続していくことが期待される。また、全工程型から出された意見のように、作品の商品化や若手誘致などの将来像を持って事業展開することで、広く事業の担い手を確保することも期待できる。

(2) 交流形態の選択

「作品鑑賞・講評」「その後の交流」「技術指導・アドバイス」「窯業に関する会話」等の、従事者の自らの作業場内での交流や、仕事で取り扱っている様な作業を取り入れた交流のような、地場産業に関わりの深い交流形態で、多くの従事者の評価が見られる。

しかし、分業工程型からは時間の不足を指摘する意見もみられ、事業によってはこうした交流が十分に行えていない現状が伺えた。また、全工程型からは、こうした交流による技術の流出に対する不安の意見も見られた。

地場産業に関わりの深い交流形態に対しては、従事者からの不安もあるが、こうした交流事業を行っていくことが従事者の評価を高め、取組みへの意欲を高めるのに有効であると考えられる。これは、受け入れる作家として「作陶家を志望する首都圏の学生」を取り上げたため、中には、受け入れたのが学生であったことが従事者の評価に大きく影響した点もみられた。

(3) 事業の継続

地場産業に依拠した交流活動の場合、事業後の交流を評価する意見が多く見られる。本稿では特に、町によって比較的長く継続された「駆出」において、従事者が交流によって構築された人脈を活用する例がみられた。まだ2度しか開催されていない「WS」ではこうした評価がまだみられないが、民間が担っており、今後事業を継続することで新たな産業振興における役割を果たすことができるものと考えられる。このように、地場産業に依拠した交流事業では、安定した事業継続のできるしくみ等が望まれるが、長期的には従事者が事業の成果を仕事に活用できる点で地場産業の活性化に寄与していると言える。

(注釈)

(1) 本稿では、窯業に関わりの深い都市住民で、作陶家を志望する首都圏にある美術系大学陶芸科在籍の学生のことを指し、この学生を作家とする。

(2) 以下これを、地場産業に依拠した交流活動と呼ぶ。

(3) 窯業では、商品の売り上げを増やすことや市場調査だけではなく、技術を継承できる人材を育成したり、商品の芸術性を高めることも産業振興に含まれる。本稿では、こうした長期的な視点の事業も産業振興を目的とした事業に含むこととする。

(4) 交流形態とは、交流場面において事業従事者の取る所作のことを指す。

(5) 昭和46年、「陶磁器デザイン試作研修会」として、長崎県窯業センターが主催したのが始まり。一時中断の後、平成8年に町が企画し、中尾地区と協力して再び立ち上げたのが現在の「駆け出し陶芸家塾」となっている。

(6) 平成15年の夏と16年の春の二度行われた。運営資金は、グリーンクラフトツーリズム研究会と民間の寄付金によってほぼまかなわれている。

(7) 波佐見町は、町内業者が一体となり町内の窯業を支え、行政としてもこうした町内の産業振興を推進・支援してきた。陶磁器の市場開拓や商品開発、新設備導入などに関して町が寄与するところは大きい。このように、波佐見町の交流事業は官民が相互に支え合いながら産業振興をはかってきた。

地場産業に依拠した交流事業もこの流れを汲むものである。「駆出」は行政主導で始められた事業であり、「WS」は民間から始まった事業である。「駆出」と「WS」は個別の取り組みであるが、共に参加者を限定し、将来の人材を育成するという長期的な視点での利益追求を目的としている。

(8) 日本の高度成長期には、急速な需要の増加に対応できず丘陵地における小規模な生産活動は一時荒廃したが、地区内の連携により現在では桜陶窯など地区内で活発にイベントが行われている。

(9) 波佐見町における初期の生産は、中尾地区をはじめとする丘陵地に限定されていたが、明治～大正にかけて個人でも所有可能な単窯が登場し、平地への進出が可能となった。窯業振興地域は、これ以降に開拓された地域である。

(10) 創業時期は、Ⅰ連房式窯により、丘陵地での生産を行っていた時期／Ⅱ単窯登場により、平地での生産が可能となった時期／Ⅲ戦後の技術革新によって、大量生産が可能となった時期の三つに分けた。

(11) 後継者について把握することで、窯業地域としての次世代の課題を明らかにするためにアンケート調査に含めた。

(12) 交流場面とは、事業の中、来訪した作家と事業従事者が一緒にいた場面を指す。

(13) 図にある英数字は評価に対応しており、また、意見の引用の場合『コメント(評価に対応した英数字—従事者番号)』のように表示することとする。

(14) 窯業の場合、商品の形状や発想が売り上げに直接関わるため、「商品の発想を得る」ことも評価に含めるものとする。

(15) 活用とは、事業によって得たものを実益に直接結びつくように利活用することを指す。

(16) 地元業者の「仕事に対する意欲」が高まることも効果に含める。なお、意欲が高まるとは作家の作業姿勢に刺激を受け、自らの窯業への姿勢を見直すことを指す。

(17) 既存の生産工程を見直すことで、商品の幅が広がる可能性があるため、「生産工程の発想を得る」ことも効果に含めるものとする。

(参考文献)

1) 前田直之・後藤春彦・佐久間康富(2001)、「交流観光による茅葺き民家集落保全の住民意識からみる課題と展望—新潟県刈羽群高柳町萩野島集落を事例として—」,日本都市計画学会学術研究論文集

2) 林兼一・山下仁・鎌田元弘・宮沢鉄蔵(2000)「中山間市町村における都市・農村交流と関連施設整備の実態—都市農村交流における生活環境整備に関する研究その1—」/日本建築学会計画系論文集第527号

3) 小山環・十代田朗・津々見嵩(2002)、「農村における都市との交流施策の類型および展開に関する研究」日本都市計画学会学術研究論文集

4) 【<http://www.town.hasami.nagasaki.jp>】04.7.20.

5) 「波佐見町史」長崎県波佐見町

6) 「波佐見焼産地診断報告書/平成10年12月」長崎県